

---

# 記憶の中の君

もみじ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

記憶の中の君

### 【Nコード】

N1929L

### 【作者名】

もみじ

### 【あらすじ】

あることをきっかけに記憶喪失になった夏木 涼。

涼は毎晩と言っているほど同じ夢を見る。

それは中学生の頃に本当にあつた出来事だった。

そしてその夢で出てくる1人の少女。

その少女と涼は、どのような関係だったのか

失った記憶を少しずつ思い出してゆく涼と、涼に思い出してもらおうべく奮闘する少女の物語です。

更新スピードは物凄く遅くなりますが、よろしく願います。

## プロローグ（前書き）

はじめまして、もみじです。

オリジナル小説はこれが処女作品です。

見難い文、そして更新スピードは物凄く遅い、高校生の駄文ですが  
よろしく願います。

## プロローグ

彼女に初めて出会ったのは中学2年生の始業式の日だった。

なぜ毎回こんなに長い話ができるのか疑問に思うほど長い校長先生の話が終わり、何もすることが無く、さらにクラス発表までもまだ時間があったので1人で校内をブラブラしていた。

桜が舞い散り生徒やその父兄方でにぎわっている校門の前を通った時、体育館裏に1本だけひっそりと桜が咲いていることを思い出した俺は校内の中で1番校門から遠い、体育館裏に向かった。

にぎやかなのは嫌いじゃ無かったけど今日は何となく1人でいたい気分だった。

体育館裏は校門と違い、とても静かだった。

風で揺れる草木の音、小鳥のさえざり、そんな自然の音だけが響いていた。

そこで俺は彼女に出会った。

この学校に入ってから初めて見る風貌だった。

自分より数センチ小さな身長、肩より少し長めの綺麗な黒髪。どこか目を引く少女だった。

そんな少女はただひたすらに桜を眺めながら立っていた。

俺の視線に気がついたのか、彼女は俺の方に顔を向けた。

「ここってとっても綺麗だね。私、気に入っちゃった」

一瞬、誰に向かって話しているのか分からなかった。

でも、ここには彼女と自分だけしかいないことに気づいて俺はようやく自分に話しかけていることに気づいた。

「俺もここは好きだな。特に春は。桜を独り占めにできるし」

「へー 桜が好きなんだ？」

「ああ、好きだな。 えー・・・お前も好きなのか？」

「桜は好きだよ。 でも前の学校には無かったんだよね」

「『前の学校』って事は転校生か？」

「うん。 一昨日、ここに引っ越してきたの」

「どつりで見ない顔だと思った」

そんな他愛もない会話を数分間、時間が経つことも忘れ、俺たちは続けた。

その頃になると1人になりたいという気持ちもどこかへ行ってしまうっていた。

「そろそろクラス発表に行かないと・・・私、転校生なのにクラス発表でクラスを知らされるのよ。 ひどいと思わない？」

ムスツとしたような表情の彼女はとても可愛らしかった。

「まあ、1人ポツンと見るのは御免だな」

「でしょう？ だから、一緒に見に行ってくれない？」

「別にいいよ」

ありがとう、そう言って彼女は微笑んだ。

そして俺たちはクラス発表の場所まで話しながら肩を並べて歩いた。  
あと少いで目的地という所で俺はあることに気がついた。  
彼女の名前をまだ聞いていなかった。

「なあ、お前ってなんていう名前？　ちなみに俺の名前は、夏木<sup>なつき</sup>  
涼<sup>りやう</sup>」

「そうかあゝ　じゃあ、涼くんだね！！　あと、私の名前は

」

## プロローグ（後書き）

終了です。

こんな感じの駄文で進めていきます。

誤字脱字の報告、感想をよろしくお願いします!!..



## 第1章 ? (前書き)

何とかGW中に更新ができました・・・

今回は長めに作っております。

通常はこの半分くらいの長さになるかと・・・  
それでは、本文へどうぞ。

## 第1章 ?

.....

月曜日の午前6:30。静かな部屋に目覚まし時計の音が鳴り響いた。

夢の途中で起こされたため、もう少し寝ておきたいと内心思いながら、しびしび目覚まし時計の音を止め、布団から出る。

ここ最近ずっと同じ夢を見る。

見覚えのある校門、見覚えのある廊下、見覚えのある体育館、その裏にある見覚えのある桜の木、そしてどこか懐かしい少女の後姿と交わした言葉。

これらは全て僕の中学校2年生の時に『本当にあつた出来事』なのだろう。

でも、その少女の顔はなぜか見れない。後姿ははっきり見えるのに顔だけはぼやけて見えない。

その少女以外のことは全てはつきりと分かるのにどうしてもその少女だけは分からない。

理由は簡単。僕が記憶喪失だからだ。

僕は高校受験を終え、家に帰宅する途中で車にはねられたらしい。

肋骨が全て折れ、足の大腿骨も複雑骨折。そして心肺停止。さらに出血もひどかったらしい。

病院に運ばれた時、親が医者にこう言われたそうだ。

生存する確立はよくて3%です。

親はこれを聞いた時、全てが終わったと思ったそうだ。

でも、結論的に僕は奇跡的に生き延びた。

はねられた場所が奇跡的に病院の目の前だったからだ。

あと5分遅ければ確実に死んでいたらしい。  
生き延びたのは生き延びたけどその代わりに記憶を失ったのだ。  
僕が事故にあつてから初めて目を覚ました時はびっくりした。  
知らない場所で、知らない人が、知らない自分の目の前で涙を流し  
ていたからだ。

「涼……よかったあ……ホントによかった……」

『涼』とはいったい何なのか分からなかった。

そしてなんでこの人たちは自分の目の前で泣いているのか分からな  
かった。  
分からないことが多すぎて僕はこんな事を言った。

「あの……僕の目の前で泣くのは止めてもらえませんか？」

知らない人の涙がピタリと止まった。潤みきった目で僕の方を呆然  
と見る。

この子は何を言っているのだろうか……きつと私たち  
をからかっているんだわ!!

たぶん、そんな事が頭の中に駆け巡ったのだろう。

知らない人たちは苦しそうに笑いながら僕に話し掛けた。

「冗談は止めなさい、涼。 冗談にもほどがあるわよ？」

「あの、さつきから気になってたんですが……『涼』って僕のこ  
とですか？」

「「「「つ!?!?」「」」」

目の前にいる知らない3人の人の顔からあの苦しそうな笑顔も消えた。

先ほどまで僕と話していて、僕が目を覚ました時に涙を流していた女性から再び涙がこぼれ始める。

先ほど流した涙と正反対の意味を持つ涙を。

そこから記憶喪失と診断されるまではさほど時間を要しなかった。

何か分からないが大層な医療機器を複数使って調べられた。

後から知ったのだが、記憶喪失になって初めて口にする言葉といえは『ここはどこ？ 私は誰？』だった。今思えばそう言うべきだったのかな？と少し後悔していたりする。

あと、学校の風景に見覚えがあるのは退院してから一度、学校に行ったことがあるからだ。

学校に行ったとき、僕の担任だったらしい先生に泣きながら抱きつかれた。

その先生は新任の若い女性の先生だったのでものすごく恥ずかしかった。

その後、僕は夢で出てくる桜の木下に行った。

あの時からだ。僕がああ夢を見るようになったのは。

僕の台詞は聞こえるのに彼女の台詞はいつも漫画の台詞のように声が聞こえない。

そして毎回、彼女の名前を聞く前に夢から覚める。

僕にとって彼女はどのような存在だったのだろうか？

何で僕はこの事だけ思い出せたんだろう？

そして、彼女はいつたい誰なんだろう？

そんな疑問を抱えつつ、今日は高校の入学式。

僕が寝たきりになっていく間に合否発表があったらしく、一生で一度の合格番号掲示に行けなかったことが少し、心残りだ。

「涼〜 早く起きなさい！！ 入学式に遅れるわよ〜」

「今、起きたからすぐ行く！！」

これからどんな高校生活が始まるのだろうか？そしてどんな人がいるのだろうか？

そんな期待と不安を抱きながら僕は朝食を食べるべく、キッチンに向かった。

入学式の会場に行くところには僕と同じく、今日から入学する生徒たちやその父兄方であふれていた。

みんな中学校時代の友達を見つけては楽しそうに話していた。

僕の通っていた中学校からも数名、この学校に入学するらしいが、記憶が無いので仕方がない。さらに事故のときに携帯電話もつぶれたらしく、誰からの連絡も来ていない。一応、卒業アルバムの写真真に目を通したり、親から仲の良かった友だちの話は聞いている。

でも、残念ながらどの生徒がこの学校に入学したかは僕の幼馴染以外分からなかった。

その幼馴染も運悪く、季節はずれのインフルエンザにかかって入学式には来れない。

なんでも、とても明るく、活発な子だったらしくとても可愛そうだ。ちなみにクラスは同じだったようだ。

さつきクラス発表の場所で同じクラスの欄に名前があったから間違いないと思う。

クラスはどこにでもあるような何の変哲もない殺伐とした教室だった。少し違うといえば、今年から黒板をホワイトボードに変えたらしい。まだ一切何も書かれていないようでマーカーの跡も残っていない。

僕は何もすることが無いので先生が来るまで机に伏せて寝ることにした。

中学3年生になると同時に私は転校した。

その中学校には1年しか通えなかったけど今までで1番転校するときに泣いたことを覚えている。

仲良くなつた友だちとの別れも辛かったけど、1番辛かったのは『涼くん』との別れだった。

私が転校してきたときに1番始めに話したのが涼くんだった。

たまたま見つけた桜の木下で立っているとそこに涼くんが現れた。

私が何となく話しかけると向こうも何となく答える、そんな感じの始まりだった。

始まりはいつもと同じ・・・でも終わりは違った。

いや、終わりじゃない。経過が他の人とは違った。

私が困っていたら自分のことは後回しにし、私のところに来てくれた。

私が泣いていたら慰めてくれ、笑っていたら一緒に笑ってくれた。

私が特別というわけでもない。ただ、彼は自分より他人という人だった。

そんな彼に私は段々と惹かれていった。

結局、この想いは伝わらなかった。

転校してから私は、想いを何で伝えられなかったのかと後悔していた。

後悔してもし切れない日が続いた。

そんな時、私に思いもよらない幸運の女神が舞い降りた。

お父さんの転勤先が前の学校に近いところになった。

しかも、今度は10年は転勤しなくてもいいそうだ。

私はあの時、どれだけ喜び、はしゃいだだろう。たぶん、気が狂ったかのようだっただろう。

そして今、彼の目の前にいる。

1年間会う事を待ち望んだ彼が目の前にいる。

私の入学した高校に彼も入学してきた。

しかも、同じクラスにもなれた。

でも、私の女神は最後の最後に裏切った。

彼は私を見ても何も言ってくれなかった。

まあ、少しはいろいろなところが成長したし、髪長さも変わって、声変わりもしたと思う。

でも・・・涼くんならすぐに気がついてくれると思ってたんだよ・・・？

あの優しくて鈍感だった涼くんは気づいてくれると信じてたんだよ？

でも何で・・・何で貴方は私を見ても何も言ってくれないの？

私は貴方にとって1年で忘れるような、そんな存在だったの？

ねえ、お願い・・・何か言ってよ、涼くん・・・

『久しぶり、元気にしてた？』

『お前・・・あいつだよな・・・？』

『お前、雰囲気変わったなあ』

何でも・・・何でもいいから私に話しかけてよ・・・

せつかく涼くんに会えたのに・・・こんな・・・こんな嫌だよ・

机に伏せてから数分後、先生が教室にやってきた。

名前は松岡<sup>まつおか</sup> 藍葉<sup>あいは</sup>というらしい。

なんでも、今年から初めて担任を務めることになったそうで、何度もかみながら話していた。

年上なのにどこか微笑ましい。

今日はあまりすることが無かったらしく、自分の自己紹介と学校案内の紙、あと入学許可書なんか配られただけだった。

先生も出て行き、クラスのメンバーたちも数人帰っていったので僕は自分も帰ろうと、配布物などをかばんにつめていた。

「やあ、夏木君。久しぶり〜 元気だったかい？」

ふと後ろから話しかけられた。

振り向くとそこには髪を肩より少し長めに切って、少し茶色い髪をした瞳も茶色いボーイッシュな感じの少女が立っていた。今の僕には全く面識がないのだが、彼女の接し方からすると、僕の記憶を失う前の友だちらしい。そして僕が事故にあって記憶喪失になったことも知らないようだ。

僕が啞然としているのを見て彼女はため息混じりにさらに続けた。



「もしかして、私のこと忘れちゃった？」

すみません。貴女どころか全ての記憶がありません。

「まったく、私があなたにあれだけのことをしてあげたのに……僕が記憶喪失だっことを説明したほうがいいのだろうか？」

「いや、あの……どう説明すれば良いですかね？……え」

「もう、またそんな風にとぼけて！！ 夏木君はそんな敬語キャラじゃないでしょう？」

すみません。自分が昔、どんな人だったか分からないんです。っていうか敬語キャラって何ですか？

そして彼女は自分の手で顔を隠して鼻をすすりながら爆弾を投下した。

「大人の階段をのぼるのを手伝ってあげたのに…… 私は使い捨てだったの……？」

ピキッ！！

周りの雰囲気が一気に固まった。

そしてなぜか僕に物凄い殺意のこもった視線を浴びせられる。

いやいやいやいや……！！！！ 僕、そんな事知りませんって！！

僕、記憶喪失なんですよ！？ ううううう！！ 何やってんだよ、記憶を失くす前の僕！！

「何、誤解をまねくようなことを言つとるんじゃ、ボケええええええー!!」

静まり返った教室にツツコミの声が鳴り響いた。

その声の主は爆弾を投下した少女の頭を平手で叩いていた。

少女は涙目になっている。ああ、ちよつと痛そう。

さらにその声の主は僕のところにも近寄ってきている。手にどこから出したのか分からないハリセンを持って。

・・・やばい。記憶のないはずの僕の身体がなぜか危険信号を察知し、後ずさりを始める。

だが、すぐ後ろには教室の壁が立ちふさがっている。すぐに追い詰められた。僕はこの時ほど教室の壁を恨んだことはないだろう。そして相手はハリセンを振り上げてこう言い放った。

「お前も何でツツコミまんのやあああああああ!!」

スパアアアアアン!!

頭をハリセンでおもいつきり叩かれた。

痛い……。半分泣きそうになる。

それに、ツツコミと言われても記憶がないから嘘か真か分からないんですっ!!

僕がうづくまっていると声の主はなぜか親切にもあの少女の言った言葉の意味を教えてくださいました。

僕に耳打ちで教えてくれたわけじゃない。大声でツツコミのように言った。

「大人の階段つて、受験勉強を手伝っただけだろっ!! まあ、確

かに一種の大人の階段をのぼる手伝いだが、誤解を招く。あと、俺の大阪の血が騒いで無意識のうちにツッコんでしまつからそういうのは止めてくれ!!」

どうやら彼は無意識のうちにあのような事をやってしまったそうだが、彼自身、あまり人を叩きたくないらしい。あと、いつの間にか関西弁が消えている。

つて言うかなんでみんな僕が記憶を失ったことを知らないの!?!? ちよつとひどくない!?!?

「いいじゃない別に!!! 私、別に誰にも迷惑かけてないじゃない!!!」

先ほど涙目になっていた少女はツッコんできた少年に噛み付いている。

いや、本当に噛み付いているわけではなくて、ただ言い争っているだけだ。

「いや、かけてるね!!! 周りの空気が3 は下がったね!!!」

「そんなの、あなたの感覚でしょ!?! 私に逆に3 ぐらい上がったように思ってたわ!!!」

「それはお前に対する同情の目だああああ!!!」

これ以上ここにいと巻き込まれそうだったので、僕は逃げるように教室を後にした。

家に帰ったらあの2人の名前を調べておこう。

涼くんの様子が変わだ。

私といた頃とは芯は全く変わってなくても、接し方が違う。なんだかよそよそしい。

あの2人は涼と仲の良かった2人なのにまるで初対面のような感じだった。

あの2人の接し方からして、険悪な仲になったわけでもなさそうだし……

まあ、私はあの2人とあまり面識がなくて、いつも涼くんから話を聞いてただけだからもしかしたらいつもあんな雰囲気だったのかもしれないけど……

もし違うとしたら、いったい涼くに何があつたのだろうか……？

……まあ、気のせいよ、気のせい。深く考えちゃいけないわ。

……明日は涼くんと話せるかなあ？

## 第1章 ? (後書き)

終了です。

次の更新は5月中にできればしたいです。

まったりと更新していきませんが、よろしく願いします。

あと、できれば感想のほうもお願いします。

? (前書き)

お久しぶりです。

ぎりぎり5月中に更新することができました(汗)  
いつも通りの駄文ですが、どうぞ。

？

次の日、学校に来ると、僕は質問攻めにあった。  
理由はもちろん、昨日の件だ。

「ねえ、秋葉さんとはどんな関係？」

「本当は手伝ってもらったんだろ？」

「ねえ・・・昨日のことはどうなの？」

こんな質問が大半を占めていた。

一応、嘘に決まっていますよ、と言っておいたが記憶が無いので分からない。

その後、場を和ませてくれた関西出身らしき少年の言葉を信じたい。そういえば、1番初めに話しかけてきてくれた女の子、なんだか親近感がわいたなあ・・・  
いったい、どうしてだろう？

あの少女との1件のせいで僕はクラスで目立つ存在になってしまった。

彼女の名前はあめみや雨宮 あきは秋葉と言っらしい。

昨日、帰ってからすぐに卒業アルバムを開いて調べた。

なんでも、彼女は僕をいじることが好きらしい。

卒業アルバムの好きな事という欄に、『夏木君をいじめることとかかわいらしい字で書かれてあった。』

いったい、前の僕は彼女に何をしたのだろう・・・まさか、本当に彼女が言っていたことがあったのでは？と疑心暗鬼になってしまっそうになる。

そして、少年の方は桐山きりやま 篤志と卒業アルバムに書かれていった。  
彼は小学校低学年の頃まで大阪に住んでいたらしく、たまに関西弁  
をしゃべってしまいうらしい。  
いわゆる、ボケとツッコミ  
この2人はこういう関係なのだろう。  
そういえば幼馴染は今日も来れていない。  
やはり、インフルエンザは長引くものなのか・・・  
放課後にでもお見舞いに行こうかな。

今日は涼くんに話しかけた。

話の内容は昨日の事についての真偽だったけどね。

中学校2年生以来に話したけど、少し声変わりしてたかな？

ちよつと、大人っぽくてこれはこれでありかも・・・

でも、発した言葉は『ちつ、違うよっ！！』そんなわけ無いじゃな

いですかっ！！』で、物凄く焦ってたから可愛かったなあ・・・

それに少し気になることがあった。

やっぱりしゃべり口調が全然違う。敬語なんて知らないような感じ

だったのに・・・

イメチェン・・・なのかな？

そういえば、この学校の構造を全く知らないことに気が付いた僕は  
校内を探検している。

あの2人にも一緒に行かないかと誘ったけど受験日に見に行つたか  
ら遠慮しておくと言われてしまった。

お前も一緒に見に行つたでしょ？と言われたが、そうだったけ？と  
流しておいた。



記憶喪失だということを説明しようかと思ったけど、昨日の夜に幼馴染と電話したら、その幼馴染が説明とかめんどくさそうだし気づかれたときに説明すればいいんじゃない？と言われたので説明するのは止めておいた。

あれ？今、思ったけどインフルエンザだったよな？何であんなに元気だったんだ？

・・・ああ、そういえば熱が下がっても2〜3日は自宅待機だった？そうだったから見舞いに行ってももう、大丈夫だよな？あんまり向こうに気を使わずに済むだろうし・・・

「どうしたの？なんか考え事してるの？」

「もしかして、エッチなことじゃないよね・・・？」

僕が考え事をしていると一緒に歩いているクラスメイトたちに話しかけられた。

彼女たちも校内を探検していたらしく、バツタリあったので一緒に校内を回っている。

最初に話しかけてきた子は結城 桜ゆづき さくらという子だ。

清楚で静かそうなお嬢様、まさにそんな言葉がお似合いの子だ。

その後若干気になるような言葉を発した子は芹沢せりざわ はるかという。

前者の子とは打って変わって、にぎやかで面白い子だ。言葉の所々に変な方向の意味を持つものを混ぜるのが玉に瑕だが・・・

ちなみに、2人も身長は同じくらいで僕より少し小さい。

僕が何も答えずにそのまま歩いていると後からしゃべりかけてきた子が口を開けた。

「もっ、もしかして・・・本当にエッチな事を・・・？」

「えっ！？ そっ、そんな分けないって！！ 本当にただの考え事

だつて!!」

「ムキになるところがまた怪しい・・・」

「うっ、うん・・・」

「ええっ!?!」

僕にどうしろというんだ!! っっていうか、軽くいじめられてないか!?!とすこし疑問に思う。

僕がすねていると彼女たちは笑いながら続けた。

「秋葉ちゃんともう、したもんね」

「えっ!?! だから、あれは誤解だつて!!」

「そっ、そうだったの、夏木くん!?!」

「・・・もういいです。勝手に言っておいてください」

2人についていけなくなった僕は歩みを速める。

その僕の行動にさすがに罪悪感を感じたのか言いだしっぺの1人が走ってきて言った。

「ごめん。さすがにいじめすぎた・・・」

その後に少し控えめな子もつづく。

「あの・・・ごめんね? ちょっとはるかちゃんにあわせすぎちゃった」

「あ、うん・・・ もういいよ・・・」

僕が苦笑いをしながら言うと、彼女たちは少し不満そうな顔をしながらも、僕の横に並んだ。

2人とも、少し扱いづらいが根はいい子なんだろうと思う。

1人寂しくブラブラしていた僕に話しかけてくれたのだから。

僕はこの時、昔の記憶が無くても普通にやっていけるよな気がした。

？（後書き）

終了です。

1話あたりの長さは大体これくらいです。

これからもよろしく願います。

？

幼馴染のお見舞いは自分ひとりで行こうとしていた。

うん。あくまで『していた』だ。実際は違う。

いつものように帰る準備をし、いざ教室から出ようとしたところで捕まった。

扉に手をかけ、横にずらそうとした時に不意に肩をつかまれたのだ。本当に不意だった為、びくっと肩を小さく動かしてしまった。

恐る恐る振り返ると気味の悪いくらいニコニコした秋葉が立っていた。

秋葉と名前で呼んでいるのは、少し前に苗字でさん付けをし呼んだところ、

「うわ〜・・・ 夏木君のさん付けキャラキモい・・・ 何これ？

新種の嫌がらせ？ ちょっとマジで気持ち悪いから止めてくれる

？」

と笑顔で罵倒されまくり、次に名前で呼んでみたら、

「うん。こっちの方がマシね。いや、前よりしっくり来るわ！

！ これからは名前&呼び捨てでよろしく〜 あっ、呼び捨てってところが重要だからね〜 さん付けなんてしたらこれから一切、勉

強見てあげないわよ〜」

と言われたからだ。

この反応からして前の僕は苗字で呼び捨てだったのだろう。

ちなみに僕はあまり勉強ができないらしい。昨日、この身で味わってしまった。

何となく自分ってどれくらい勉強ができるのだろうか？と疑問に思っ

て中学の頃のドリルを開いてみたがこれがもう、ひどいと言いか言いがなかった。数学なんてもつてのほかだ。

一次関数というものをやってみた結果、100点満点中40点。少し涙が出た。

このひどい結果を目の当たりにし、他の教科は一切手をつけなかった。

まあ、文系なんだろう。一応、高校にも通ってるし。

あと、その数学をしている時に妹が手にミュージックプレイヤーを持って部屋に入ってきた。

僕の部屋に共同のパソコンがあるからだ。

そして、僕がテストをしているところを見て妹は手に持っていたそれを床に落として啞然と僕を見て言った。

「お、お、おっ・・・お兄ちゃんが勉強してる・・・!?!?」

前の僕は勉強なんかテストの直前ぐらいしかしていなかったらしい。啞然とし、僕を見ている妹を見て分かった。

まあ、このことから勉強を見てもらえなくなるのはたいへん困ると判断してこう秋葉のことを呼んでいる。

そして今、その秋葉は僕の肩を掴んで僕を教室に戻した。

そしてニコニコした状態のまま顔を僕の顔に近づけてくる。

秋葉はお世辞抜きでかわいいので顔をあまり近づかされると目の行き場に困る。

そして、鼻と鼻がくっつきそうになったところで秋葉は言った。

「ねえ、今から伶<sup>れい</sup>の見舞いに行くんでしょ？ なら私たちも連れてって」

夏木君のことならお見通しよ、と言わんばかりの勢いで言われた。記憶がないので前の僕とは行動が違はずなのに。

あと、伶とは僕の幼馴染のことだ。

そこで僕は気が付いた。

秋葉はさつき、『私たち』と言った。うん、確かにそう言った。周りを・・・と言うか秋葉の後ろを見ると桐山くん、結城さん、そして芹沢さんまでいた。

指を向こう側へ指していたのでこの3人がそうなのだろう。

断る理由もないので僕はいいよ、と返事をした。

でも、これが失敗だった。

一言で言うつと五月蠅い。

秋葉は桐山くんとボケとつっこみで遊んでるし、芹沢さんは昼みために僕を変態扱いしようとする。

そして、まあ・・・結城さんはそれにあおられ芹沢さんと一緒に少し違う方向から僕をいじってくる。

昼に反省してると言った事が嘘みたいだ。

まあ、芹沢さんは別として、結城さんは悪気があるわけではないだろうけれど・・・

案外、この悪気の無さが僕の正常な心を鋭く突き刺す。

芹沢さんの悪乗りを止めさせればこの攻撃が全て回避されるので、止めてくださいという目で芹沢さんを見ると、いやん。そんなエッチな目で見ないで、とさらに悪乗りを重ねてきた。

うん。さすがにイラツときたよ・・・

でも、なんかこの風景を見ると心が落ち着く。

記憶になくても体が覚えているとでも言うつのか、なんだか懐かしい。秋葉と桐山くんのボケとツッコミ。芹沢さんと結城さんの僕に対する攻撃。

桐山くんと秋葉は同じ学校だからたぶん昔、こんな風景でも見ていたんだらうなと思う。

芹沢さんと結城さんは・・・たぶんこんな感じの人が周りにいたのだらう。

芹沢さんみたいな人は兎も角、結城さんみたいな人が周りにいたの

か疑問に思う。

なにせ、こんな雰囲気がお嬢様見たいな人が僕の中学校にもいたとは思えないからだ。

今時、珍しいぐらい清楚で純情な人がたくさんいるとは考えにくいからだ。

卒業アルバムにも結城さんはいなかったし・・・

・・・んまあ、いたんだろう。別に結城さん以外居ないというわけではないし。

もしかしたら、この懐かしく思うのも気のせいかもしれないし・・・と、まあ、こんな他愛も無い会話&風景を数分堪能(?)した後、

目的の幼馴染の家に到着した。

ほーこれが伶の家かぁ〜と秋葉さんが感想を述べた。  
来たことが無かったみたいだ。

インターホンを鳴らすとすぐに応答があった。

出てきたのはおばさんだった。

「はい、羽瀬川はせがわですけど・・・で、涼くん!? お見舞いに来てくれたの!? 涼くんもいろいろたいへんだから来ないと思ってたけど着てくれたのね!!! ...あ、クラスの子も着てくれたのね。ちよっと待っててね」

インターホン越しに僕のことがかかったのは最新のカメラつきのものだったからだ。

世の中物騒だから最近買ったの〜と僕の母親と雑談していた。

僕の家のはカメラも付いてない、従来型だったはずだから少しくらやましい。

これだったら鬱陶しいセールスとかなら居留守が使えるそうだ。

そんな事を少し考えているうちに、おばさんが出てきて僕たちを家の中へと入れてくれた。





? (後書き)

終了です

誤字脱字の指摘と感想、よろしくお願いします!!

あと、できれば評価も・・・) (殴

それではまた、次の更新で ノシ

この話は後で改稿するかもしれませんが・・・ (苦笑)

？ (前書き)

お久しぶりです。

最近、ネタ切れが始まりました・・・orz

そして更新スピードも低下中・・・

どうしたことだろう・・・ハア・・・

？

「やあー!!」

僕たちが家の中に入ると、そこにはインフルエンザだとは全く思えないほど元気ハツラツとした伶が立っていた。

表情は暇を持って余っていて何かしたいけど何もすることが無いところにおもちやが降ってきたときの子供のようだった。

この表情や言動を見る限り、僕が考えていた通り、自宅待機の期間だったようだ。

「やあ、伶、久しぶりだね!! 元気だった?」

「おおっ!! 秋葉も来てくれたのか!! さすが我が親友!!」

「当たり前じゃないか!! 伶は大切な情報源&親友だからな!!」

そう、2人は言いながらハグをした。

伶と秋葉は中学校時代からの親友のようだ。

2人とも性格が似ているもの同士、仲がいいんだろう。

伶も秋葉も心から喜んでるようだし・・・

・・・ん? 今、秋葉の口から恐ろしい単語が聞こえた様な気がするけど・・・気のせいですかね?

「まあ、まあ。相変わらず秋葉ちゃんと伶は仲が良いわね」でも、立ち話はなんだから、早く伶の部屋にでもみんな言ってきて頂戴。

後でお菓子でも持って行くから」

伶のおばさんがにこにこしながら提案してくれた。  
僕たちの中でも『じゃあ、お言葉に甘えて』といった雰囲気の流れる。

そこで僕は幼馴染の顔を見た。

別に表情を伺ったわけではなくて部屋まで案内してくれないかという意味で、だ。

たぶん、何度か部屋に上がったことはあるのだろうけど、僕は一切覚えていないからだ。

ところが、僕が見た幼馴染の顔にはなぜか汗が垂れていた。

運動した後に流れるさわやかな汗とは違い、尚且つ、病気が原因とも全く見れないような冷や汗がどつと出ていた。

なぜここまで焦るのか僕には分からない。

男ならベッドの下に今、あの本が隠しているとかという理由で部屋に入れたくないという気持ちになるのは何となく分かる。

もっ、もちろん、僕の部屋にそんなものは無いけどっ!!

でも、伶はどこからどう見ても女子だし、戸籍上も、もちろん女子だ。やましいものを隠しているとは全く思えない。

・・・もしかして、BLもの(18禁)が・・・!?

そっ、そんなわけないよ・・・ね・・・? ..?

伶がそんなもの持つてるわけない・・・よ・・・ね・・・? ..?

やばい・・・寒気がしてきた・・・

いや!!さすがにこんなことを考えるのは失礼だ!!伶がそんなものを持つているわけが無いじゃないか!!

・・・じゃあ、何でこんなに焦っているのだろう?そう僕が考えているとツッコミ少年が声を上げた。

「なあ、あそこに『伶の部屋』て書かれてあるプレートがかかって

るけどあれが羽瀬川の部屋か？」

指差す方向を見ると確かにそこにはそんなものがあつた。

「ええ、そうよ」

おばさんも肯定したので間違いないらしい。

「ちよつ、ちよつと待って！！部屋の中散らかつてるからリビング  
に行かない？」

伶の顔には尋常じゃないぐらいの汗が出ている。  
この表情に気づいたのか秋葉は、

「女同士だし私はいいいね！！」

と言って走り出した。

その行動に一瞬だけ遅れて伶も走り出す。

「いや、本当に待って！！ 秋葉でも無理っ！！ 今回は見逃して  
！！！」

「この焦り方からして何か面白いものを部屋に隠してると見た！！

さあ！！ 部屋搜索よっ！！」

「何にも面白そうなものなんて隠してないって！！！」

「もう遅いわっ！！ さあ、見せてもらわよっ！！！」

「いやああああああああ！！！！！！！！！！」

・・・こんなにはしゃいで大丈夫なのかな？

一応、病み上がりだよ？

あ、秋葉が部屋の戸を開けて中に入っていた。

・・・あれ？妙に静かになった・・・？

・・・。。。

・・・。。。

・・・。。。

数十秒後、伶の部屋からはなぜ脱力した2人が出てきた。

「だから・・・面白いものは無いって言ったのに・・・ シクシク」

「いや・・・ごめん・・・ まさかあんな物があるとは夢にも思わなかったから・・・さ・・・」

「・・・怒ってないの？ グスンッ」

「いや、それ普通、私の台詞だから・・・」

「でも、あれ見たでしょ・・・？ 裏切ってたのよ秋葉のこと・・・  
グスンッ」

「まあ、結果的にそうかもしれないけどさ・・・ でもよくよく考えれば伶のほうが先にそうだったんだろ？」

「・・・まあね・・・ 一応、幼馴染だし・・・」

「だったらさ・・・ そんな伶に頼んだ私も悪かったんだよ・・・」

「そうかもしれないけどさ……………」

「あゝもうっ!! じゃあ、これからはライバルってことでよろしくな!! これで文句は無いだろっ?」

「えっ!?! …… あ…………… うん。 お手柔らかに…………… よろしくお願ひします……………」

「お手柔らか!?!」

なんだか分からないけどあの一瞬で2人の人間関係が激変したようだ……………

いつもボケ役の秋葉が突っ込んでるし、伶が半泣き状態で出てきたし、

・ なんだか知らないけど芹沢さんと結城さんは僕のこと睨んでるし……………

桐山くんは「モテる男は辛いね」なんて意味の分からないことを言ってくるし……………

でもまあ、伶が元気なことは分かったしお見舞いは無事終了ってことでもいいよね?



？（後書き）

終了です。

誤字脱字の報告、感想よろしくお願いします！！

？（前書き）

遅くなつてすみません。

絶対、もう更新しないと思われてるかもというぐらいほったらかしにしてました。

ほんと、すみません。

そして短いですが、今回。

なので今日中にもう1話、更新したいと思います。

?

「ねえ、今度の夏休み、海に行かない？」

脈絡も無く彼女は言ってきた。

俺が、?という顔をしていると彼女はハアとため息をついてもう一度言う。

「だから!! 明日から夏休みでしょ!! 海に泳ぎに行こうって言うてるの!!」

そういえば明日から夏休みだっけと思い出しつつ、答える。

「いいけど、誰を誘う? まだあつてないと思うけど雨宮とか桐山あたりでいい?」

俺の返答のどこに不満があるのか全く分からないが彼女はため息をついた。

「涼くん・・・どれだけ鈍感なの?」

彼女が何か呟いたような気がして、何か言ったか?と尋ねるがなんでもない慌てた様子で返事をした。

「とにかく!! 夏休みに『2人で』海に行くわよ!!」

2人でというところを強調された。

特に用事もないし、彼女といっしょに行くことも嫌ではないので0

Kした。

そういえば、水着ってどこにしまってたっけ……？

「夏休みにみんなで海に行きます!!」

終業式を翌日に控えた放課後、秋葉がみんなを集めて高らかに宣言した。

みんなとは僕、桐山くん、結城さん、芹沢さん、そして伶だ。

「行きますって決定事項かよ……」

桐山くんが呆れた感じで突っ込みを入れる。

「ふふふ、これを見なさい!!」

秋葉はかばんの中からある封筒を取り出した。  
その中には、

『おめでとうございます!! 特賞：熱海2泊3日1グループ様ご招待 が当選しました。ご予約の際、封筒に書いてある37桁の暗証番号とグループ様の人数をお伝えください。ただし、1人以上、6人以下までのご招待です。』

と書かれていた。

みんなが、え?という顔で秋葉を見ると秋葉は自慢げに言った。

「と、いう訳で海に行きます!! みんなの都合を教えてください!!」

「おいおい、親の了承はいいのかよ……」

「いいの!!! どうせ大丈夫よ!!!」

どこからあの自信が湧いてくるのだろうか少し疑問に思う。

「私は全然OKよ!!! うちの親、放任主義だし」

「わっ、私も大丈夫だと思います……」

芹沢さんは兎も角、結城さんがOKとは意外だ。

いかにもと言う箱入り娘という感じのなのに……

「桐山と夏木はどうせ大丈夫だろうし伶もOKでしょ」

うん、なんで決め付けるのかな？

多分そうだろうけどさ……

「はい、はい!!! じゃあ、ここに無理な日を書いて!!! んで、みんなが行ける時に行くよ」

桐山くんはため息をつきながら、女子たちはとても嬉しそうな雰囲気です。予定をせつせと書き始める。

「夏木くんも早く書こうよ」

結城さんがボーと突っ立っている僕を手招きしている。

僕はうんと答えて特に何も無い予定を書くためにみんなのもとへと歩き出した。



？（後書き）

終了です。

誤字脱字の報告、感想の方よろしくお願いします！

？（前書き）

言っていた話目です。  
短いですが・・・



？

「「「海だあああああ！」「」「」

なんだかんだあって、夏休み。

雲ひとつない、青空。

灼熱のように熱い砂浜。

大勢の他人がいる中でお決まりの言葉で始まった。

「ほら、涼も桜もいつしよにー！！」

僕と結城さんが叫んでいないことに不服のようで秋葉がふくれっ面  
で言ってくる。

それを僕と結城さんは苦笑いをしながら遠慮する。

むうっとさらに頬を膨らませたが僕たちは断固として言わなかった。  
言うぐらいなら秋葉がしかめっ面をずっとしていてもらっほうが被  
害が少ないだろう。

主に僕の精神に対して。

結城さんはそんな事を言うような性格ではないので余り強要はされ  
なかった。

最後のほうはほとんど、というかむしろ僕だけに言ってきた。

あの海に向かって叫ぶんだ、夏木涼おおお、と。

見ているこっちが恥ずかしかった。

あと、言い忘れていたことがある。

最近、僕はようやくみんなの名前を以前のように呼べるようになった。  
た。

以前というのは察しの通り、事故にあっ前のことで、伶にその頃の  
呼び方を教えてもらった。

そうしたら、みんなに、あれ？敬語キヤラ止めたの？飽きた？などあまり不信感も無く受け入れられた。

以前のことを懇切丁寧に、手取り足取り教えてくれた伶様、様だ。でも、少し不思議なのが、以前の口調を教えてもらっただけなのに異様に身体を密着して教えてくれたことだ。

他にも危つくキスをしてしまうぐらいまで顔を近づけてきたり・・・ホント、なんだったんだろう？

あ、あと敬語もできる限り使わないようになってきた。

でも、気を抜くと敬語が出てしまうが・・・

でも、なぜか一人称だけが『僕』のままだ。

『俺』というのがどうも自分には性に合わないような感じがする。

「なあ、夏木」

「うん、何？」

「海だな」

「まあな」

「釣りがしたい」

「え？」

「いや、釣りがしたくなかった。俺の漁師魂に火がついた」

「いや、桐山ん家、普通のサラリーマンじゃん。最近、課長から次長になったって言ってたじゃん」

「そんな些細な事はどうだっていいんだよ！！釣りがしたいんだよ、

俺は!!」

なぜか急に暑くなった。

いや、もともと夏だから暑いんだが、桐山からやけに熱気を感じるこれは暑いを通り越して『熱い』だ。

桐山もこの暑さに頭をやられてしまったのだろうか、こんな急に語りだして……

「焦っちゃダメよ、桐山くん」

不意に後ろから声がした。

振り向くとそこには芹沢さんが立っていた。

「釣りは明日って秋葉が言ってたわ」

「おお!! よっしゃあ!!」

「……よかったね、桐山……」

うん、本当、よかったね。

「そんな心配はいらないんだから遊びまくるわよ!!」

とまあ、こんな感じで僕たちの旅行は始まった。

? (後書き)

終了です。

誤字脱字の報告、感想の方よろしくお願いします！

・・・次はいつ、更新するかな・・・orz

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1929/>

---

記憶の中の君

2010年11月12日11時24分発行